

中野区立弥生保育園における造形表現活動の実践

—活動記録「木曜日のたんぽぽ組さん」からの報告—

A Practice of Art Activity in Nakano Yayoi Nursery School:
Report from the Activity Document “Tanpopo Class on Thursday”

捧 公志朗
SASAGE, Koshiro

本実践報告について

筆者は、2009年より中野区立弥生保育園での造形表現活動をサポートしている。このサポートは、保育現場において日々子ども達の造形表現に対する保育方法の検討や表現の展開、あるいはその問題解決について、保育園やクラス担任の保育士と連携して協議を行っていくものである。また、こうした中野区内の保育園との連携・協議は、本学が中野区と取り組む地域連携活動の一環として位置付けている試みの一つである。

筆者は2010年度に、3歳児クラスの1年間の造形活動に関わり、そのクラスの保育士の取り組む造形活動実践の観察を記録シートとしてまとめ、保育園と保育士、そして筆者との三者間での相互的な共通媒体としてのサポート・ツールを作成した。本報告書で取り上げる活動記録「木曜日のたんぽぽ組さん」がその媒体である。

この「木曜日のたんぽぽ組さん」の活動は2010年度に実施されたものである。木曜日の午前中に行われる3歳児クラスの造形表現活動（一斉活動）の観察と記録編集を筆者が担い、毎月1回のペースで園に提示し、クラス担任の保育士とともに活動を振り返ることによって展開した。筆者はクラスで行われる活動を客観的に対象化し、保育士の活動のねらいや子どもの姿を造形表現の観点から確認し、記述していくことをベースに、クラスの活動への援助を進めていった。筆者のこの活動における立場は、子ども達と直接的に造形活動を行うファシリテーターではなく、保育園と保育士が取り組む造形活動の支援（アート・サポート）を行う者として参画している。

2010年度の3歳児クラスの造形表現活動は、合計24回の活動が行われ、24回分の「木曜日のたんぽぽ組さん」が作成された。この年間を通じた活動の経過から、弥生保育園の園目標との関連性や保育士の造形表現活動を保

育におろす際の考え方、あるいは、保育現場での教材や素材加工技術の問題等、様々な考察観点が発見された。弥生保育園ではこうした包括的な活動の反省を、園内の保育士で組織される「絵画造形プロジェクトチーム（絵画造形PT）」が集約し、園内研修を通じて、園全体の取り組みとしてオープンにする仕組みを持っている。また弥生保育園での造形表現活動は、2011年度の中野区子ども教育部保育園・幼稚園分野実務研修において保育実践事例として発表され、中野区内の保育園に報告された。

本報告は、作成された「木曜日のたんぽぽ組さん」の記録テキストと写真から、弥生保育園での造形表現活動の取り組みの実践を紹介するものである。保育園での表現活動の実践を理解する資料として、今後の保育者養成に向けた美術教育に活用していくことを望みたい。

中野区立弥生保育園の造形表現活動の取り組み

中野区立弥生保育園の造形表現活動に対する取り組みの概要は、以下のとおりである。

1. 保育園の目標：豊かな人間性を持った子どもを育てる（丈夫な子ども、主体的に行動する子ども、思いやりのある子ども）
2. 絵画造形保育の目標：のびのびと自分を表現できる子ども
3. 絵画造形プロジェクトチーム（絵画造形PT）の活動の取り組み
 - ・2009年度
 - ① 定期的に各クラスの作品を見せ合い意見交換する
 - ② 保護者に対し子どもの絵画表現の年齢的発達特徴を伝えていく
 - ③ 子どもの絵画活動における発達の流れと年齢についてまとめる

- ・2010年度
 - ① 3歳児クラスの造形活動実践(「木曜日のたんぽぽ組さん」作成の実施)
 - ② 園外での子どもの絵画作品の展示「やよいこどもミュージアム」の実施
- ・2011年度
 - ① 中野区立保育園実践発表の準備と実施
 - ② 各月1回の園内研修の実施
 - ③ 弥生保育園「絵画活動指導計画」の作成

2010年度の3歳児クラスの造形表現活動

2010年度の弥生保育園3歳児クラス「たんぽぽ組」の造形表現活動は、以下のとおり実施された。この活動が、活動記録「木曜日のたんぽぽ組さん」としてまとめられた。

1. 3歳児クラス「たんぽぽ組」の造形表現活動のねらい
 - ① 全身を使った感覚的なあそびを造形につなげ、つくることの楽しさを味わう
 - ② 身近に隣接する公園の環境を活かし、自然物を利用した活動を行っていく
2. 2010年度の「たんぽぽ組」の造形表現活動
 - ・2010年4月8日(木): さくら集め・砂あそび
 - ・2010年4月15日(木): こいのぼり作り
 - ・2010年4月22日(木): 大きなこいのぼり作り・絵の具あそび
 - ・2010年5月13日(木): 紙テープあそび
 - ・2010年5月20日(木): 紙テープによる貼り絵
 - ・2010年5月27日(木): 遠足
 - ・2010年6月10日(木): だるまこあそび-1
 - ・2010年6月17日(木): だるまこあそび-2
 - ・2010年6月24日(木): だるまこあそび-3
 - ・2010年8月9日(木): 植物の色水作り
 - ・2010年8月23日(木): フィンガーペインティング
 - ・2010年9月9日(木): 運動会のお魚作り
 - ・2010年9月16日(木): 木の枝の装飾
 - ・2010年9月30日(木): タンポのお絵描き
 - ・2010年10月14日(木): 運動会の絵、遠足の絵
 - ・2010年10月21日(木): おしゃれな花飾り
 - ・2010年10月28日(木): モンブランケーキ作り
 - ・2010年11月11日(木): ロールケーキ作り
 - ・2010年11月25日(木): クリスマスツリーと紙粘土のオーナメント作り
 - ・2011年1月13日(木): 鬼のお面作り
 - ・2011年1月20日(木): 枯れ葉を使ったお絵描き-1
 - ・2011年2月10日(木): おひな様の色紙作り

- ・2011年3月3日(木): 枯れ葉を使ったお絵描き-2
- ・2011年3月17日(木): 発砲トレーによる版画あそび

活動記録「木曜日のたんぽぽ組さん」の紹介 (2010年度・3歳児クラスの造形表現活動の記録)

活動記録「木曜日のたんぽぽ組さん」は、筆者が2010年度の1年間を通じて作成した弥生保育園でのアート・サポートのツールである。「木曜日のたんぽぽ組さん」は当日の活動の様子を、造形的観点(造形活動のねらい、教材や素材加工技術についての確認、保育室の活動環境の設定について、等)から観察し、筆者の所見をテキストと各回20カットの活動記録写真によって編集した紙媒体の記録シートである。媒体のオリジナルは弥生保育園と筆者が相互に保管し、必要に応じて閲覧に対応している。

また媒体は事務的な報告書としての作成を避け、優しい文体で言葉を伝えることに努めている。なぜなら、造形表現分野の専門用語は保育分野では伝わりにくい言葉が多いことや、通常の保育の中で使用されている柔らかな文章表現が保育園では馴染みやすいのではないかと考えたからである。「木曜日のたんぽぽ組さん」は、保育園と保育士との相互的な共通媒体として活用する目的上、媒体を用いる双方の共通理解に機能することを前提に作成している。

以下が活動記録「木曜日のたんぽぽ組さん」のオリジナルの全テキストである。本紀要では、各回のテキストに対し1カットの活動記録写真を対応させ、紹介をする。

「木曜日のたんぼ組さん」

2010年4月18日（木）

「さくら集め・砂あそび」

暖かなお天気のもと、たんぼ組の皆は、お外で元気にあそびました。園の向いにある弥生公園の桜は満開を迎えています。そうした園の周辺環境や自然物とのふれ合いから本日の活動が展開されていきました。

○活動の考察

外あそびの前に、クラス全員で2階ベランダの小松菜を収穫しました。小松菜はお昼ごはんの食材として使われるものでしたが、その作業や小松菜の香りを感じる（先生の働きかけ）を通じて、事後の「素材にふれる」ことへの導入がなされました。またベランダでの活動中、何人かの子ども達が日向に寝転びながらその暖かさを楽しんでいる様子が見られました。南側に開放感を持つ園の環境には、様々な現象を通じ「自然」を感じることのできる場が見つかると思いました。

本日の外あそびでの活動を「さくら集め」と「砂あそび」から観察しました。「さくら集め」は、公園のさくらの花びらを拾い集めること、「砂あそび」は集められた花びらを装飾材料として用いながら砂の造形を楽しむことです。この活動においても、事前の小松菜の収穫（小松菜を収穫し食材にする）と同様に、「集めたもの（＝収穫したもの）を素材化する」というプロセスが発見されます。そうしたプロセスを通じて、子ども達に対し「素材」への意識や関心が働きかけられたのではないのでしょうか。

上記のような観点を考慮し、本日の活動での素材である「さくらの花びら」と「砂」について、その印象や特徴を記述してみたいと思います。

（さくらの花びら）

- ・色：白い、薄ピンク色、枯れかかったものは薄茶
- ・感触：軽い、薄い、やわらかい、さらさらしている、くしゃくしゃした感じ、ふっくらとした感じ
- ・その他の印象：時間の経過とともに変化をする、ほのかな香りがする、壊れやすい

（砂）

- ・色：全体的に黒っぽい、グレー
- ・感触：ざらざらしている、じゃりじゃりした感じ、しっとりしている、細かい、重さがある、握ることができる、固めることができる
- ・その他の印象：質感の変化があまりない、造形しやすいが壊れやすい

記述して判ることは、この二つの素材は、対照的な性質を多く持っていることです。原材料が石である砂は恒久的な物質であるのに対し、さくらの花びらは乾燥とともに変化しやすい素材です。色や感触も実に対照的です。ですがその反面、二つはともに、安心して手で触れることができ、造形への転化が容易な素材と言えます。そうした意味において、今回の活動は全体を通し、手の感触を楽しむ要素を持つ活動だと思われました。

身近な園の環境の中から素材を引き出し、その性質を使いながら造形活動を展開する方法は、まだまだ多くの実践を生む可能性を持っていると感じます。これからも弥生保育園の日常の保育の中から、そうした事例を発見できればと思います。

2010年4月15日（木）

「こいのぼり作り」

青空を雄大に泳ぐこいのぼりの姿は、子ども達の元気な成長を願う象徴のようです。そうした5月の節句に合わせた造形活動が、たんぼ組さんで行われていました。

○活動の考察

事前の活動で行った白色の手形の押された「こいのぼり」の台紙に、色紙のピースを貼っていく。このような今回の活動には、いくつかのねらいが複合的に設定されていると感じました。ここではそのねらいと想定される四つの項目をピックアップしながら、本日の活動を考察してみたいと思います。

- (1) のりの接着技術を経験する
- (2) 色のレイアウトの楽しさを経験する
- (3) 「こいのぼり」の制作から季節感や節句を感じる
- (4) 手形を付けた台紙作りから作品の完成まで、制作の過程を経験する

(1) は、子どもの年齢に応じた活動の目的として、実際の紙の接着を通し、のりの性質や適切な量を経験することを目指すものです。のりは通常の保育活動で 사용되는もの（やまとのり）でしたが、のりを一つの造形材料として意識した造形活

動に展開はできないかと考えました。例えば、絵の具を少し混ぜ、着色されたのりを、筆を使って使用してみるなど。既成概念を時にははずしながら素材を眺めてみると、様々なアイデアが生まれると思います。

(2) については、色紙のピースを台紙の上でレイアウトしてみることに活動を始めることによって、子どもの意識が、のりづけ(接着技術)より、こいのぼりの装飾の方に動くのではないかと考えられました。また接着方法との関連において、色紙のピースの裏へののりづけではなく、台紙側にのりをつけ、そこに色紙のピースを置いていった時、造形活動にどのような変化があるのか、今後の興味深い考察課題だと思います。

今回のような節句に向けた造形制作は、家庭での保護者との会話においても、とても有効に働くものだと感じます。また成果物(作品)を通じ、保育での造形活動を親と子どもとが共有することの意義を、より積極的に造形(色やかたちの面白さ)に転化できる可能性も感じられました。造形表現の持つ知覚領域は、視覚に特化するものであるという点をふまえ、「こいのぼり」の持つ視覚的特徴を掘り下げながら、活動に展開してみるのも面白いと思います。

(4) であげる制作過程の経験は、一人ひとりの子どもにとって、自分が最後まで制作した意識を育てることに繋げられる経験だと思われます。一斉活動では、時間的な制約や全体の進行の問題もありますが、可能な限り、作品の完成への満足感を与える活動を目指したいものです。

2010年4月22日(木)

「大きなこいのぼり作り・絵の具あそび」

前回の「こいのぼり作り」に続き、今回は巨大なこいのぼりを共同で制作しました。完成作品の大きさもさることながら、活動そのものもダイナミックで、とても楽しい展開となりました。

○活動の考察

前回行った「こいのぼり作り」は、個人での造形制作活動でしたが、今回はクラスが2グループに分かれての共同制作型の活動でした。「こいのぼりを作る」「絵の具をつけ台紙に手形を押す」「(のり)ねばねばした感触」等、前回の制作で経験された様々な事柄が、本日の活動にも多くの場面で反映されていたと思います。また今回の活動は、単にこいのぼりという成果物を制作するだけでなく、絵の具あそびを含みながら、「色を感じる」、あるいは「色を塗る」という経験を子ども達が十分に味わえた活動だったと思います。

活動を振り返り、以下の二つの点について考察してみたいと思います。

(1) 色を楽しむこと

(2) 活動の展開方法について

(1) について、今回の活動は青と黄色のポスターカラーが使用されました。また家庭での洗濯についての考慮もなされ、絵の具に洗剤を混ぜて活動が行われました。2色を選んで造形活動を行う場合、ともすると色の選択で悩んでしまうものですが、A先生のお話では、スムーズに色は決定したとのことでした。選ばれた青と黄色は、新緑を感じさせる季節感を持ち合わせています。また黄色の持つ光の反射の力や、青の持つ寒色の印象は、ヒトの視覚に刺激を与える効果があります。そうした点では、活動中での新鮮な感覚が保持される色を選ばれたと思います。

また絵の具を、直接、手につける行為は、絵の具の物質感を直に味わう感動があると思います。活動の始まりの際、指の先にしか絵の具をつけていなかった子ども達が、だんだんと大胆に絵の具を扱うことを覚え、「だらけ」と言って、手の平を大きく使って絵の具の混色を楽しんでいました。筆で絵の具をとく場合と、直接、手で絵の具を混ぜ合わせる場合とでは、色を楽しむ行為そのものはどのように違ってくるのでしょうか。子どもの成長や発達過程において、物やその情報を身体的に把握していくことは、必要かつとても大切な行為だと思います。前回ののりを指先につけた経験(ねばねばした感触)が、今回の絵の具あそびによって、一気に楽しい経験に開かれたと思います。

また今回の活動の素材に対する補足として、「指絵の具」についても簡単に触れておきたいと思います。指絵の具は、多くの保育現場でも取り入れられているように、簡単に作ることでできる教材です。素材とその基本の割合は、絵の具(少し):でんぷん糊(大さじ3):手洗い用洗剤(うすめたものを少し):水(大さじ3)。また指絵の具を使つての絵画制作は「フィンガーペインティング」とも呼ばれ、1930年代にイタリアで試みられた表現技法です。絵の具を手につけ、直接画面に塗りたくる行為は、清潔な家庭環境で神経質に育てられた子どもや、抑圧感を持った子どもにとっては、自由さや開放感をえられる効果があると言われています。そうした意味において、現代の、しかも都市環境で生活をしている子ども達にとっては、意義のある内容を持った表現活動だと思います。

(2) の活動の展開方法について、活動の中に導入された「ストーリー性」と「完成作品の壁面装飾への展開」は、とてもすばらしい展開がされていると感じました。ビニールシートを海に見立てた環境設定と、そこに大きな魚(こいのぼりの台紙)が出現するストーリーは子ども達にとってとても理解しやすく、しかも視覚的にも強い印象を与えるものでした。そして、子ど

も達の制作に対するワクワクする気持ちを生む契機にも繋がれたと思います。

また「完成作品の壁面装飾への展開」は、こいのぼりが空に泳ぐ姿をイメージさせ、とてもダイナミックでした。A先生が自由な感覚で壁面にランダムに貼っていったことも、展示の面白さに繋がったと思います。ですがそうした要素にもまして、今回の活動が自然に壁面装飾へと移行されたことは、先生方が、保育室の空間や子ども達の活動の流れや気持ちを十分に把握されているからなのだと感心させられました。

2010年5月13日（木）

「紙テープあそび」

今日は保育室の中で紙テープを使った活動を展開しました。お部屋全体を使い、また身体も十分に動かしながらのダイナミックな一斉活動となりました。自由に紙テープを扱うことによって、様々なあそびが見出されていきます。

○活動の考察

いつものように一斉活動に入る前の子ども達は、おもちゃを使ってコーナーごとにあそんでいます。その中の一つのグループでは、粘土を使って造形を楽しんでいました。子ども達は細かいものを作るのに夢中です。みみず、かたつむり、レモン、豆……。作られるものは、大人の手の大きさからでは作りにくい繊細なものが多く見うけられました。粘土の持つ可塑性の特徴は、手の触覚や運動がそのまま造形物に残されるという点です。そうした点から作業を見直してみると、粘土あそびは、子どもの手の大きさや指先の動きから造形を楽しむあそびだと言えます。また出来上がった小さな造形物は「葉っぱのシート」「お豆のお皿」等に見立てられ、子どもの思い思いの物語が紡ぎ出されました。

お片付けの後、本日の活動での素材である「紙テープ」が紹介されました。「運動会に使ったテープだよ」という先生の比喻から、子ども達は「かけっこ」のゴールを想像したのでしょうか。あるいは身体を思いきり動かした記憶を思い起こしたのでしょうか。先生の導入での言葉かけが、本時全体の活動に繋がっていったことはとてもユニークでした。

まずは先生方が部屋の壁を支持体にテープを張りめぐらし、それを子ども達は見ています。「やりすぎー」「お部屋がディズニールランドみたい」という子ども達の声からは、紙テープによって空間のスケールを感じている子ども達の様子が伺われます。それは一本のテープの線によって、保育室の空間が把握されていったのだと思います。またテープを張られることによって変化をしていく環境が、非日常の風景を生み出し、子ども達のワクワクする気持ちを起こさせることに繋がっていったと思います。保育活動の場（環境）を作っていく際、日常の見慣れた場を一変させる出来事を導入することも、非常に有効な手段だと気付かれます。

設定された紙テープの環境は、子ども達のあそびの展開によって様々に変化をしていきます。どのようなあそび方が見られたのか書き出してみたいと思います。

○紙テープによるあそび

- ・ジャンプ
- ・ひっぱりっこ
- ・海に見立てる
- ・大きなお風呂に見立てる
- ・ひもにして舞い上げる
- ・電車ごっこ
- ・かためてボールに見立てる
- ・むすぶ

こうしたあそびは、今回の活動で用いられた紙テープの特質を見出すトピックスだとも言えます。「触覚的に安全な素材である」「長いものである」「容易にちぎることができる」「加工しやすい」等、これらの特質を眺めてみると、紙テープは、「手を使う作業」と「身体を使う運動」の二面性を持った活動素材であることが判ります。また先生方が用意されたテープは7色あり、視覚的にも子ども達の素材への接近を促す要因となったのではないのでしょうか。

また個人的に興味を持った素材の特質として、紙テープは子どもの適度な力で切れることに感心しました。ひっぱりっこをしていた際、突然、ぶちんと切れてしまう素材によって、しりもちをついている子どもの姿がとてかわいらしく、楽しそうな様子として発見されました。

2010年5月20日（木）

「紙テープによる貼り絵」

前回の「紙テープあそび」での素材を、個々の造形活動に展開をした「貼り絵」の作業。7色のテープを絵の具として置き換

えながら、画面構成を楽しむ子ども達の様子が見られました。

○活動の考察

子ども達は色彩に対する興味を強く持っています。ブロックやおまごとの道具など、保育室にあるおもちゃの配色からも、保育と色感の関連性の大切さを知ることができます。前回の活動で使用した「紙テープ」も、7色のテープが用意されました。色彩の持つ効果や性質を保育への導入に繋げることは、様々な方法があると思われます。

また色彩と素材の性質(素材感)の関係も、造形活動にとってはとても重要な視点です。色彩から素材への興味がわき、それを扱う段階になってから、二次的に技術的な「加工」の問題が出てくるからです。そして更に造形活動は、イメージを具体的に成果物(作品)として表現をしていく側面(主目的)を持っています。こうした「興味」「加工技術」「イメージの具体化」という素材への関わり方の持つ変化を整理し、それを適切に扱っていくことが、造形活動を行う上において大切なポイントになってきます。

今回の活動は、「紙テープあそび」で使った素材を再利用した「貼り絵」でした。「紙素材を台紙に貼る」という一見するとシンプルな活動内容ですが、そのねらいは様々な観点を持っていると思われました。先生方が考えられたと思われるねらいを次のように書き出してみました。

(活動のねらい)

- (1) 紙テープの持つ素材感に触れる
- (2) 色彩を楽しむ
- (3) 紙の加工技術(ちぎる、のりづけ等)を経験する
- (4) かたちを楽しむ
- (5) イメージを表現してみる

前述でも触れましたが、造形活動では、「興味」「加工技術」「イメージの具体化」という素材に対する関わり方の変化の整理、またその適切な扱い方が、とても大切なポイントです。列記した活動のねらいの(2)の「色彩を楽しむ」は、紙テープの素材への導入(興味)と言えます。前回の活動での経験も付加され、子ども達にとって紙テープは、とても親しみのある素材だったと思いますが、他方では、あらたな造形活動の素材として再認識していくことの難しさもあったかと思われます。そうした際、紙テープの素材の特質の一つである「色彩」をより積極的に導入に用いることは、有効な一つの保育方法の手だてだと思えます。色彩からイメージされるものについて、子ども達に連想させる言葉がけもどんどん行っても良いかと思えます。

今回の活動の中での「加工技術(ちぎる、のりづけ等)」に関しては、子ども達にとってはこれまでも経験されてきたものでした。細くて薄い紙テープにやまとのりをつける作業は、少し難しかったようにも見られましたが、やまとのりをつけることから、紙素材には様々なバリエーションがあることを経験できたと思えますし、また紙テープそのものの性質の一端に触れることができたと思えます。

(4)の「かたちを楽しむ」についてですが、じっくりと集中して活動に取り組んでいたT君の作った「象」は、長いテープを鼻に見立て、かたち作りと想像を十分に楽しめていた作例だったと思います。またMちゃんの作った「顔」は、画面の中でかたちを作っていくポイントを理解していた作例でした。

今回の活動全体を通じ、一番難しかったことはねらいの(5)の「イメージを表現してみる」だったのではないのでしょうか。先の例にあげたT君やMちゃんは、イメージとかたちの繋がりがかなり明確だったため、作品がスムーズに成立しやすかったのだと思います。また逆に、作業からイメージがうまく浮かび上がってこない子どもの中に、活動に飽きてしまう姿も見られたと思います。イメージといかたちの繋がり、素材の性質とかたちの繋がり等、活動の流れの中にあるいくつかのポイントの関連性への配慮が、子どもとの造形活動をより充実させていくものになると思われます。

2010年5月27日(木)

「遠足」

今日は、たんぼ組さんの待っていた遠足の日です。お弁当を持って出発です。時折、お天気雨がぱらぱらと降ってきましたが、ゴールの弥生公園まで、皆で元気よく歩くことができました。

○活動の考察

今回は造形活動はお休みですが、遠足の道すがら、子ども達が興味を持ったものを記録としてまとめてみました。遠足は、いつもとは違う場所へ行ってみるというワクワクした気持ちを起こさせるイベントです。それだけに子ども達にとっては、通園に使っているいつもの道も特別な環境(場)に感じるものです。そうした場から、子ども達はどのような現象に興味を持ち、何を発見するのでしょうか。

松の実、なめくじ、めだか、あり、柿の実、桑の実等、子ども達はとても小さなものを発見する名人でした。またそれらをじっくりと観察することも楽しんでいる様子でした。しゃがんで、見つけたものと向き合う子どもは、独自の距離感で対象物を捉えています。対象物の大きさは小さなものばかりですが、子どもの視界からはとても大きなものとして認識されるのではないかと思います。こうした子どもにとっての場への視覚的な捉え方については、私個人にとっても、今後も考察してみたいテーマの一つです。

2010年6月10日（木）

「どろんこあそび-1」

梅雨の時期にさしかかり、晴れた日の園庭でのあそびは、子ども達にとってはとても待ちどおしい時間です。本時では砂場と水場を思い切り使い、「どろんこあそび」を行いました。大きな環境を使つての活動でしたので、全身がどろだらけになるまで、子ども達はのびのびとあそびました。

○活動の考察

保育室に着替え用の洋服を準備し、10時10分から活動が始まりました。ベランダから裸足で園庭に降り、砂場に向かいます。初めは興奮ぎみだった子ども達も、徐々に環境とあそぶ行為がなじんできました。今回の「どろんこあそび」の場合、子ども達への保育の造形的観点は、いくつかの点に集約されると思われます。観察を通じて感じられた次の二点についてまとめてみたいと思います。

（1）素材に対する触覚的体験

園庭での「どろんこあそび」は、土や砂と水の素材感に親しむあそびと言えます。J君とMちゃんを中心に水場近くに現われたチョコレート工場は、土と水を混ぜ合わせる楽しさを具体的なイメージ（チョコレート）に置き換え、空間としての場所（工場）を設定することができたと思います。また多くの子ども達の様子に見られましたが、器の中に素材を入れ、それぞれの分量を調節しながら素材の「固さ」に興味を持っていました。それはおままごとや料理ごっこをきっかけとして、素材の物質性や、混合によって起こる変化に触れていたのだと思います。

これらの素材の物質性は視覚によって感覚されるだけのものではなく、素材の持つ「重さ」を直に手（触覚）で捉えながら感じていくものだといえます。手で混ぜ合わせる行為そのものが、素材を認知していくことに繋がるわけです。固体としての土や砂に水が加えられることによって、泥として状態変化がなされます。また水の分量を少なくして、お団子のように成形することが可能になる砂の状態変化も発見します。「どろんこあそび」は、重さを持った触覚性によって素材の持つ「抵抗感」を楽しむあそびなのだと思います。

（2）行為と場の関係

砂場の中では大きな山と、川や海が作られました。また水場近くの水たまりはチョコレート工場に見立てられました。土や水、あるいは砂といった素材は、造形的な行為の痕跡をそのまま残すことができる性質を持っています。ですので、あそんでいる場の風景や状況は絶えず変化をしています。子ども達は素材に関わる行為が直接的に場に反映される、また環境を作り出すことに興味を覚え、それを楽しんでいるのだと思います。

こうした行為と場の関係は、今回の「どろんこあそび」の他にも多くの造形活動の場面の中にも見られると思います。例えば、保育室に展示してあったたんぼ組さんたちのマーカーによる描画もその事例の一つでしょう。マーカーは発色も良く、手軽に描く行為を紙の上に定着することができる画材です。子ども達は手を動かす運動によって描画（またはスクリブル）を楽しみますが、この時期の子ども達の作品を、あまり絵画的に描かれたものの形や意味付けを求めとり扱うのではなく、紙という場に対し、どのように行為を行ない、どのような痕跡が残されたのかという視点を持ちながら、場への空間認識の現われとして描画を扱うことも大切だと思われます。

2010年6月17日（木）

「どろんこあそび-2」

たんぼ組の子ども達は、先週から引き続き、今日も「どろんこあそび」を楽しみました。今回も全身を思い切り使つてのあそびでしたが、同じ活動であっても、随所に前回との違いが見られました。素材への親しみがあそびへの積極的参加に繋がったようです。

○活動の考察

当日は真夏日のような強い日差しが照りつけ、園庭の地面の木漏れ日は一段と濃く見える午前中でした。先週に引き続き、今回もたんぼ組の皆は「どろんこあそび」の活動を行いました。前回は素材への触覚を確かめながら活動を楽しんでいた様子

でしたが、今日はとても落ち着いてあそんでいる印象を受けました。J君とMちゃんは、やはりチョコレート工場を作りましたし、砂場では大きな山や川、海といった空間が出現し、キッチンとして見立てられたテーブルにはいろいろな料理が並びました。子ども達は先週の続きをするかのように、同じ場所でのあそびに集中していたと思います。ですが先週とは違う「落ち着き」は、どこから生まれるのでしょうか。こうした点を問題提起としながら、本時についてまとめてみたいと思います。

大辞林によれば、「落ち着く」とは、「動揺が静まり、安定した状態になること」とあります。また他の意味として、「周囲のものと調和して、こちらの気分が休まること、安心して見ていられるようになる」との語意も持っています。少し前回の振り返りにもなりますが、この「どろんこあそび」という活動は、身体を使った行為とそこにでき上がる場との関係において、活動が子ども達にもたらす意義が立ちあがってきます。先週、全身がどろだらけになるまで素材と関わり、その物質性に触れ、ダイナミックな場の作られる時間を経験することができたからこそ、自分の周囲のもの（砂場や水場といった環境、あるいは他の子ども達のあそびや行為）と調和する力がつき、安心して「どろんこあそび」ができ、変化をくりかえすあそびの場を見ていられるようになったのだと思います。また、素材の性質を十分に感じてきた経験も、落ち着いてあそべたことにつながったことは言うまでもありません。二週にわたって継続化されたあそびにみる子ども達の成長は、本当に感心するばかりです。

シャワーをあび、着替えの終えた子ども達は、お昼ご飯まで保育室であそびます。その多くの子どもはマーカーを使った描画を行いました。先ほどまでの砂と水と土と違い、自分が思いの通りにコントロールできるマーカーの線は、自由な勢いの感じられるものが多く見られました。また一部の子どもは、マーカーから生まれる線の表現性に興味を持ち、描く力を変えながら描画を楽しんでいました。アメリカの造形研究家のケベックによれば、スクリブルによる線の表現は20種類に分類されるとの研究報告がなされていますが、たんぼ組で見た線の表情は、描く力の加減によって感じることでできる画材の抵抗感を楽しみ、その結果、様々な表情の線が画面上に見出された作品であったと思います。力を入れ過ぎたためマーカーの先を壊してしまう場面もあり、そこに立ち会っていた私は反省すべき点は多いのですが、その反面、線を引くことを本当に楽しんでいる子どもの姿からは感動的な思いが持てました。「どろんこあそび」での経験や素材に対する感触が、事後的に描画活動に反映されたことは、結果として大きな成果を得ていると思えました。

2010年6月24日(木)

「どろんこあそび-3」

今日は、たんぼ組さんたちの「どろんこあそび」の三回目です。落ち着いてあそぶことができた前回から、今回は園庭の空間への捉え方に変化が見られたと思います。また保育室の壁面に展示されていた「絵の具あそび」の作品も、「どろんこあそび」との関連性を持ったダイナミックなものでした。

○活動の考察

園庭での「どろんこあそび」も本時は三週目の活動となります。一週目は、素材に触れる経験と、あそんだ行為によってできあがる場が発見されました。二週目の活動では、落ち着いて素材に親しむことができたと思います。そして今回は、環境への把握や、計画性が子どもの様子から見受けられました。特に毎回作られる水場近くのチョコレート工場なる場は、今回は水路の位置がまず初めに決められ、最終的には砂場と連結するプロセスがありました。

こうした一連のあそび方を観察してみると、「どろんこあそび」という行為が、「素材に対する触覚」や「身体的運動」によって、子ども達自身の周囲に作られていく環境や空間を取得していくあそびであるという特性が見えてきます。砂場と繋がった水路に水を流そうとしたため、水場近くの地面は池のような大きな水たまり状態になってしまいましたが、こうした結果も、場を能動的に作ってみようとした子ども達の表現の現われだと思えます。

また当日の保育室には、事前の活動で行われた「絵の具あそび」の作品も飾られていました。フィンガーペインティングによって、模造紙に黒色と茶色のポスターカラーで描かれているようです。制作は、色彩や作業の特性（手を動かす運動によって見出される痕跡が結果として場や作品となる）が「どろんこあそび」と類似しているため、子ども達には導入しやすく取り組みやすい活動だったのではないかと想像します。ですが二つの活動には、いくつかの相違点があるのでそれを取りあげてみたいと思います。

まず一つ目として、行為の結果が残るか残らないのかといった点に注目してみましょう。「どろんこあそび」の場合、あそんだ砂場はどんなに大きな造形物を作ったとしても、活動後には元の砂場にもどされます。このことは言い換えれば、「どろんこあそび」はかなり思い切りあそびきっても良いという許容範囲を持ち、また素材に触れる行為のみに保育活動を集中させることができると言えます。その反面、「絵の具あそび」の場合は、紙の大きさの範囲、紙にのせることのできる絵の具の量の問題等、物理的な範囲が設定された上で行われる活動であると言えます。また一枚の紙に対し、何人の子どもが制作に参加するのかということも活動設定条件の重要な点となってきます。

二つ目の相違点として、二つの活動の子ども達の運動性について考えてみたいと思います。「どろんこあそび」の場合、手を動

かしている目の前の作業は身体の移動によって、連続的に空間に広がっていきます。「絵の具あそび」の方は、身体の移動がなく、制作行為は視野の範囲に収まるものとなります。3歳の子どもの視野は、身体の運動との連携が未発達であるため、狭い範囲の中でのものを見ています。ですので「絵の具あそび」の場合、子どもの視野の範囲を意識して保育のねらいを設定することがとても重要なこととなってきます。

2010年8月9日（木）

「植物の色水作り」

夏に入り、たんぽぽ組さんたちはプールでの活動を中心に保育が進みます。週の火曜日から木曜日までの三日間がその活動です。また夏休みをとる子ども達もいるなど、クラス一斉での造形活動が少し難しい中、今日は園庭や園舎周辺の植物を採取して色水作りを行い、身近な自然に親しましました。

○活動の考察

徐々にですが、本時まで、この活動はたんぽぽ組さんの保育の中におろされてきました。先週までの二回にわたる月曜日の午前中、興味のある子ども達の自由あそびの中で、この「植物の色水作り」を行ってきた経緯があります。一週目のオシロイバナの花びらや、シソ、ドクダミの葉などを、すり鉢を使って潰すことから始め、二週目はその材料にピーマンの葉を加え、視覚的にも濃い色出しの実験がなされました。そうしたプロセスを経て、今日に行った一連の活動での作品作りに当たる「漉き紙を用いた折り染め」にまで展開をしていきます。一見、ささやかに見えるこの活動は、植物の採取（素材を探す、素材の準備）、色水を作る（素材をすり潰し、水を加える）、染色を楽しむといった、かなり広範囲な作業内容を含んでいます。

今回の活動で確認しておきたい点は、この活動に対する保育者のねらいです。活動が自然観を子ども達に伝えるためのものであるのか、あるいは造形表現活動として取り組んでいったものなのかという二つのねらいの選択肢が想像されますが、先生方はどちらをその目的としたのでしょうか。作業のプロセスや子ども達の姿を見させて頂きながら私が感じた保育者側のねらいは、前者の「自然観を子ども達に伝えること」だったと思います。

今回の活動内容の組み立て方も含め、これまでのたんぽぽ組さんの保育活動の多くの場面からもこの自然観に対する思いは感じられました。4月のサクラの花びら集め、遠足での植物や昆虫への注目、どろんこあそび等、担任の先生方の保育観にある具体的なモチーフとして、この「自然」というキーワードが、随所に見受けられるのです。このテーマ設定に対する是非は別として、テーマを「自然」と設定することにより、子ども達の造形表現活動をどのように展開するのかという方法論が導き出せるのではないかと思います。ではそうした観点から、再度、今回の活動を振り返り、次の二点についてまとめてみたいと思います。

（1）素材の準備

今回は造形の材料として植物の色素を利用しました。お絵描きでいえば絵の具、染色でいえば染料やインクといった材料に当たります。いつもは保育者側から与えられるその材料が、今回の場合、周囲の環境から探し自分で作り出すといったプロセスの中から生まれていきます。材料自体が身近に存在し、それを子ども達自身が取り扱っていく経験は、とてもユニークだと思います。画材としてチューブの中に入っている絵の具も、元は鉱石や貝などの自然物を原料とした顔料から作られていますし、また日本の藍染めやアフリカの泥染めもその染料は自然物です。こうした材料は、長い時間をかけ、素材の取り扱い技術や色の定着の強度を確実なものにしたものですが、最初の段階では、今回のたんぽぽ組さんでの活動のような、自然物を造形に取り入れてみようとする人間の意志から始まっていることには変わりありません。そうした意味においても、タンポポ組さんの取り組みは、子ども達の自然に触れる経験を大切にしたいものであると感じます。

（2）漉き紙を用いた折り染め

色水を染料として、紙にその媒質を合わせてみようというイメージも、保育者側の自然観を感じさせるものです。紙を障子紙とした部分も、染料との適合性を感じます。今回の成果物は発色性が弱いものでしたが、反面ではそれが、「色の淡さ」を表現するものでした。子ども達の発達においては、造形的な作業の結果が視覚的に認識しやすいものが、一般的には、保育には適していると考えられています。ですが今回の活動においては、その全般的なプロセスの中で、「色の淡さ」を見いだす因果関係がはっきりとしています。そうした活動の持つ成果の現れの特徴を意識的に取り扱い、その美しさを子ども達にどのように伝えていくかという方法論を、指導案の中で考えていくと良いと思います。

2010年8月23日（木）

「フィンガーペインティング」

お盆も過ぎ、たんぽぽ組さんの子ども達は、だんだんと普段通りの人数がそろってきます。子ども達の真っ黒に日焼けした顔や体を見ると、暑い夏に負けず元気にあそんでいた様子を想像します。今日のたんぽぽ組さんの活動は、一斉活動によるフ

インガーペインティングでした。

○活動の考察

先生方で行った先週のミーティングの際、今回の活動の提案がなされました。「黒い台紙に指で絵を描く」「絵の具は3色くらいを使用させたい」「花火や夏の思い出などを描くと楽しいのではないか」「台紙は丸いものを使用し、壁面装飾に展開しても楽しい」など、先生方から自発的な意見が多く出されました。活動に対する先生方のイメージがかなり具体的だったこともあり、私からは、使用する絵の具と紙の色のことと、個々の子ども達の描き終える絵のタイミングについてのお話をさせて頂きました。

素材の色については、最終的な装飾を考慮し、黒より濃紺の方が空間の見え方が軽い印象になることを伝えました。黒い台紙は絵の具の色がはえるのですが、保育室の設えや壁面の色との調和が心配されます。美術館のように広く真っ白な壁面であれば、複数の作品によって空間全体がドット状の面白い場として見えてくることが予想され、台紙の色は壁面に対しより主張性の強い黒を選んでいたいと思うのですが、クリーム色の壁面や設えの密度等、保育室の空間の要素との関連性からは、台紙は色の主張性を弱めることが適当と判断されます。つまり現状の部屋の雰囲気と調和をしつつ、個々の作品の集合（ドット状の見えがかり）の面白さが認識できる色をイメージすることが、台紙の色に対するアドバイスのポイントでした。

また絵の具の色については、彩度を高めるようそれぞれの色に少しだけ白を混色することを提案しました。

使用したい色数は3色程度とのことでしたので、色の基本色である赤、青、黄色が適切と考えられます。実際に使用する絵の具が、多少の色味の中を持っていても（例えば赤といっても、オレンジ（黄色系）から紫（青系）まで、かなりの色の巾があります）、台紙との色の関係性や活動自体には大きな支障は出ないであろうと予測されます。

そうした事前の協議があり、当日の活動が展開されていきました。絵の具の準備を進めているT先生の周辺に子ども達が集まってきます。白が混色される絵の具を見て、子ども達が「白がやられた」と言っていたことが印象的でした。またポスターカラーの匂いのことを感じている子ども達の様子も見られ、前回までの植物の色水あそびの経験が続いていると思われました。今回の絵の具の内、赤が青系であったため、混色によって鮮やかな力強い紫系のピンク色に変化しました。各色とも発色の良い素材として準備されたと思います。

素材の準備が完了し、10時から活動が始まりました。T先生が指の説明を丁寧に行い、「お母さん指を使って描く」「色は混ぜない」「次の色を使う際は、指の絵の具を拭き取る」など、作業上の細かな約束が子ども達に伝えられます。フィンガーペインティングという、ともすれば手の平いっぱい絵の具を付け、大きな画面に全身を使って行う活動のイメージがあります。今回の活動は、これまでの「どろんこあそび」等で経験された手の触覚を大切にする活動の延長線上に位置付けられると思われませんが、単に素材の感触を楽しむことのみに視点を置かず、一枚の絵を描くという意識も強く含まれていると感じられました。

こうしたテーマの中には、子どもの発達過程を考慮し、自己のイメージを完結的に表現することの意味が含まれていると思います。子ども達は絵を描く中で、一つの象徴を描きます。それは中学や高校の美術の時間で習う「写生」ではなく、一つのイメージを紙の上にかたちとして現す行為なのです。ですので、同じ画面に描画が継続されてしまうと、同一画面上に複数のイメージ（象徴）が重なってしまう結果が生じてしまいます。こうしたことを避けつつ、どこで絵が完結をするのか、あるいは子どもがどこで表現を終えるのかを、保育者がそのタイミングを見極めることが重要だと思います。事前のミーティングの際にお話しした個々の子ども達の描き終える絵のタイミングについては、こうした造形活動に対する支援のあり方への問題提起だったと言えます。

2010年9月9日（木）

「運動会のお魚作り」

秋にさしかかり、保育園では10月の運動会の準備がそろそろ始まります。クラスでの造形活動も、その行事に合わせた内容が見られます。本時では運動会の小道具として用いる「お魚のオブジェ」の色塗りを行いました。

○活動の考察

今回の活動は「お魚のオブジェ」の色塗りでした。活動は単に小道具の作成だけを目的としているのではなく、その作業の中で、筆を使って着色を行ってみることが盛り込まれていました。たんぼ組の子ども達は、初めて筆という道具を使って絵の具を塗る経験をします。「筆を使う」という作業の中に、子ども達の様々な姿が見られましたが、そうした様子を通じて、子どもの描く行為と道具（筆）との関係性も発見されたと思います。筆の持つ構造の特性を基に、以下の二点について活動の様子を振り返ってみましょう。

(1) 筆と絵の具の量

まず、筆という道具の基本的な構造を整理してみたいと思いますが、道具は、「軸（細い棒の部分）」と「毛（繊維の束）」の

二つから成り立ちます。当然ながら毛の部分に絵の具が含まれていきますが、その毛に対し、子ども達は筆を使う作業を通じて、どのくらいの絵の具の量を吸収できるかを理解していきます。子ども達のこれまでの活動を思い起こしても、フィンガーペインティングやのりを使った貼り絵、絵の具あそびなど、指の先（あるいは手）につけられた絵の具やのりが、その付着所としての紙に向かってなすりつけることで、どのくらいでその量（絵の具やのり）が指から無くなるのかを、すでに経験しています。今回の作業では、たんぼ組の皆は初めて筆を使ったわけですが、「絵の具を紙の上になすりつける」ことに対する抵抗感はなかったと思われます。むしろ、毛の中にどれだけの絵の具の量が含まれていくのかを、作業によって実際に経験したのではないのでしょうか。絵の具が毛の中に無くなっているのに何度も塗り返してしまい、紙を破った子どもの姿も見られましたし、逆に毛に絵の具を付けすぎてしまい、紙が絵の具を吸わない状態になってしまった場面も見られました。

(2) 紙までの距離

前述でも筆の構造に触れましたが、軸のある道具で絵の具を塗ることが、子ども達にとっては難しかったと思います。これまでの活動の経験では、手に絵の具やのりをつけて直接紙にこすりつける、つまり、手が筆という道具であって、しかもそれは軸の無い筆だったと言えます。ですので、子ども達のこれまでの経験では、紙までの距離を考えずに絵の具やのりを扱っていたことになります。筆を初めて使うことは、軸によって作られる距離を感じながら、紙から離れて描いてみることなのだと思います。そうした結果、子ども達はそれぞれが自分にじっくりくる筆の持ち方によって、軸の問題を乗り越えようとしていました。

筆を使うことは子ども達にとって少し難しかったかもしれませんが、段階的な発達を考慮した保育において、身体的な行為から道具を使った行為への移行は、様々な経験の場面を作り出します。この時期の造形活動を進めるポイントの一つとして、道具の構造への考察はとても重要だと思います。事前の教材研究も、そうした視点から行ってみることも良いでしょう。

2010年9月16日（木）

「木の枝の装飾」

園庭に植えられていたケヤキが伐採され、たんぼ組の皆も親しんでいた保育園の風景が少し変わってしまう出来事がありました。切られた木の枝を使っての本時の活動は、いつも見ていたケヤキへの思いを込めた保育活動となりました。

○活動の考察

今回の活動は、たんぼ組のベランダの目の前に植えられていたケヤキが伐採されたことを動機として始められています。子ども達の成長を見守ってくれた木への感謝の意味を込めて、先生方は、枝の装飾を行うことを決められました。子ども達もそうした趣旨を理解し、また先生と同じ気持ちで活動に入れた様子でした。活動は、伐採された2メートル程の2本の枝を使って、そこに毛糸を結び付けて装飾するというものでした。

活動は木への思いや関心から始まっているものでしたし、木や毛糸を使った制作は、これまでの自然素材に触れる活動（植物の色水作りや、どろんこあそび等）の延長としても捉えられるものだったと思います。そうしたクラスで行ってきた保育活動の流れからも無理がなく、また先生方が持っておられる自然との触れ合いを大切にしたいという保育への思いも反映され、子ども達はとても集中して活動に取り組んでいました。そして今回の造形活動の中でおろされた「毛糸を結ぶ」という行為は、作業の集中力と楽しさを増加させるものとして働いたようです。

細い枝に毛糸を巻きつけ、最後に結ぶという作業は、手先の細かい集中力を要します。巻きつけることが出来た、また毛糸の端と端を結べたことは、たんぼ組の一人ひとりの子ども達にとって、大きな喜びだったと思います。この二つの行為は技術的にも難しいものですし、そうした分、達成感も味わえるものです。前回の筆を使った活動でも同様のことが言えますが、発達の過程において、道具や技術の問題が保育の中に入ってくる場面で、表現を仲立ちとして、子ども達はそれを自己の中で乗り越えていくことを経験します。道具や技術を使って造形表現が出来た、あるいはその逆に、造形表現によって道具や技術を使えることが出来たという経験そのものが、幼児期の保育活動にとっては非常に重要な観点となり得るのではないのでしょうか。造形表現活動が単に制作物の完成を目指すだけに留まらず、幼児期の子ども達の発達を支援する方法として機能していくことを期待したいと思います。

また今回の活動では、制作後の作品は、保育室の壁面装飾へ展開されました。子ども達が自身の作った作品を日常生活の中で鑑賞出来ることはとても良いことだと思いますし、また今回の活動の場合、自然物であるケヤキの枝の変化（木が枯れていく、葉が落ちていく等）に対して、子ども達がどのように反応するのか注目してみることも大切だと思われます。結びつけた毛糸が変化しない分、それとは相対的に、時間とともに変わっていく木の表情が発見されるはずです。

2010年9月30日(木)

「タンポのお絵描き」

前々回、たんぽぽ組の子ども達は初めて筆を使った活動を行いました。マーカーやクレパスと違って、軸の長い描画道具の筆は、様々な経験を子ども達に与えたと思います。今回はタンポを使い、筆とは違った感触を楽しみながら、お絵描きをしました。

○活動の考察

タンポは感触のとても柔らかな道具として、幼児の造形活動の導入期では多用される絵画用具の一つと言えるでしょう。絵画用具と言っても、描画的に細かな線を描くための道具ではなく、絵の具を先端のスポンジ部分にしみ込ませ、スタンピングによる絵の具の表情を楽しむ絵画表現あそびに適したものです。そうした意味からもタンポは、3歳児クラスのたんぽぽ組での活動には有効的に活用出来る道具だと思います。今回は、絵の具の代わりに、朝顔や植物の葉をすりつぶした色水を使ってタンポあそびを行いました。

たんぽぽ組はこれまでの活動でも、植物の色水作りを楽しむあそびを、数回にわたり行ってきました。この活動は、担任の先生方の自然に触れることを保育に入りたい思いからだったと思います。色水作りは、子ども達には経験のあるものでしたし、落ち着いて活動に取り組んでいる様子でした。また、子ども達は二人組になり、擦ることと鉢を押さえることの分担やその作業の意味を理解した上で、丁寧に活動を行っていたことがとても印象的でした。そうした親しみにおいて、植物をすりつぶした際の匂いに対する反応も、とても良かったと思います。造形活動を通して、五感に触れること、共同作業が出来るようになること、自然に触れること等、保育に対する様々な意味付けが含まれていたと感じます。

タンポを使った活動は何か具体的なかたちを描くものではないということが、作業を進めるうちに、徐々に確認されていったのではないのでしょうか。線を描きたがる子どもや、完成する作業の着地点が解らずに飽きてしまう子どもの姿も、そうした理由から見られたと思います。そうした意味においても、今回の活動のねらいはどこにあったのか、あらためて検証することはとても大事なことです。私なりに検証してみると、今回の活動は、「タンポで描かれた現象を楽しむ」というねらいが想定されます。描き始める前からかたちのイメージを持つのではなく、描かれた結果を楽しむことが、タンポを使った活動には適していますし、こうした制作内容の性質から言えば、視覚的に結果がはっきりと現れるような色彩計画も必要なのだと思います。ですが今回の場合、植物の色水を使っての活動ですから、匂いの要素も活動に積極的に取り入れ、例えば、「植物の匂いのする模様作り」というテーマに活動を持っていくことも可能だったのかもしれない。

また造形活動に対する発達が早い子どもや、造形感覚のある子どもは、タンポによって作られる表情から出来上がりをイメージしたり、紙の上に出来た現象からかたちを象徴的に捉えている姿も見られました。Mちゃんが出来上がった作品を「ぶどうの木」と呼んでいたことも印象的な場面でした。

2010年10月14日(木)

「運動会の絵、遠足の絵」

弥生保育園の秋は、行事がめじろおしです。運動会ではお魚のオブジェを使った発表や玉入れを行い、そうした風景を、子ども達は絵を描きながら思い出しました。皆の作品が壁面にはられる中、本時では、その後に行った遠足の思い出を絵にしてみました。

○活動の考察

保育室の壁面にはられた運動会の絵は、画用紙に保育用マーカーで描かれたものでした。マーカーは発色がとても良く、描く行為の跡が、鮮明な線として画面に残されていきます。また今回の活動で使用した保育用マーカーは、長さが短く、子ども達にとっては指先から絵が生まれていくような感覚で作業に取り組める道具です。日頃の保育の中でも使われている道具ですし、子ども達は抵抗感なく、運動会の様子を描いている印象を持ちました。

そうした自由に描かれている線画ですが、月齢の違いによって、かたちの表現の現れの差が大きく、三段階程度に別れていました。それらは、スクリブル(なぐり描き)の段階の絵、丸がはっきりと描けている絵、人のかたちや運動会の情景を描いた絵とに分類されると思います。かたちや情景が表現出来ている絵の中には、運動会の会場を真俯瞰した構図で描いているものや、人が何人も登場する玉入れの絵もありました。また真横から風景を捉えているものもありました。こうした造形表現の発達した子ども達は、作業を十分に楽しめた気持ちが、ストレートに絵に現れていたと思います。また丸を描いた子ども達は、多分もうすぐ象徴的なかたち(人のかたち等)が現れると予測されます。

一方、スクリブル期の子ども達は、描こうとする具体的なイメージはあっても、それを表現する技術の未発達さから、線が何重にも重なってしまう状況が絵から読み取れました。幼児のスクリブル期の活動支援の一つの方法として、線が重なる前に

紙を替え、絵をその都度終わらせてあげることが有効な方法だと思います。線が重なってくる理由は、描かれた線に触発されて、描こうとするイメージが連続的に浮かんでくるからなのです。イメージが変わる前に紙を換えてあげることで、その子どもが持つ一つひとつのイメージを描き終わらせることが大切だと言えます。

壁面にはられた運動会の絵も、本時で取り組んだ遠足の絵も見て驚かされることは、この時期の子ども達の描画表現は急に発達するのだということです。例えばHちゃんは、運動会の絵では玉入れの全体の状況を描くことが出来、また遠足の絵では、だんご虫やお弁当の細かな描写も出来るようになりました。運動会の絵の制作が自信になっていることが、はっきりと伝わりました。

また本時では、描画活動の後、「やよいランド」で行うお店屋さんごっこに向け、南台商店街を皆で見学して回りました。運動会や遠足の思い出の絵と同様、イメージ作りから造形活動を導入される先生方の保育の意図を感じました。どのようなお店屋さんが出来上がるのか、今から楽しみです。

2010年10月21日（木）

「おしゃれな花飾り」

暑かった夏を超え、きれいな花を咲かせてくれた朝顔は葉が落ち、大きな種を付けただけのつるとなりました。つるを切り取りリース状に仕立て、そこにドライフラワーを飾りつけ、おしゃれな花飾りを作りました。出来上がった花飾りを頭にのせ、男の子も女の子も、皆が楽しい気持ちになりました。

○活動の考察

保育室に到着する時は、いつも自由あそびの時間です。ブロックであそんでいる子ども達、折り紙をしている子ども達、皆、思い思いに動いている時間です。その一角で、A先生が朝顔のつるで、リースのような輪を2、3名の子ども達と作っていました。出来上がった朝顔の輪をすでに頭に着け、そのまま他のあそびをしている子どももいます。これまでの活動でも先生方が意識的に保育におおられていた自然物への親しみが、たんぽぽ組の日常の保育室の風景に混ざっていました。クラスの人数分の輪が用意され、今回の一斉活動が開始されます。本時の活動は、朝顔とドライフラワーを使った花飾りの制作です。

A先生が作られた朝顔の輪が一人ひとりに配られ、そこにドライフラワーを飾り付けていきます。ドライフラワーは花束になっていたものを使用し、子ども達が一人ずつ、茎の長さ100mm程をハサミでカットし、輪の飾り付け用の花を用意していきしました。子ども達にとって、素材を自分が切る経験は、作業や出来上がりの作品に対しての愛着を生むものに繋がれたようでした。輪を飾る花素材が準備出来、いよいよ制作に入っていきます。

ドライフラワーをさしていく行為は、月齢にはあまり関係なく皆が取り組めるものでした。ドライフラワーをどんどんさしていく子ども、早速の完成品をかぶり、陽気な様子になっている子ども、また、さしたドライフラワーをねじって止めようとしている子ども等、様々な子ども達の取り組みの姿が見られました。また今回の成果物が装飾品だったためか、花飾りを頭につけ「おまつりをしよう」と提案する子どもや、「ドンドンドン」と太鼓を鳴らすしぐさをする子どももいました。

クラス全員での集合写真、ダンス、他のクラスに見せに行く等、造形の制作活動がどんどんと発展的に展開されていきます。作る楽しみだけではなく、それを使って子ども達自身が何かに変身するようなワクワクする気持ちになったことは、とても大きな収穫だったと思います。今回の花飾りの制作活動は、活動が一つの表現領域に留まることなく、総合的な表現あそびに拡げることの出来た事例と言えます。このことは、活動の素材や内容の問題からだけではなく、先生方も本当に楽しんで関わることが出来たからでしょう。A先生が子ども達と手を繋ぎ、輪になって踊っていた様子はそのことを象徴する風景でした。

今回の花飾りは、子ども達にとって特別な装飾品だったと思います。また女の子よりも男の子の方が、身につけた嬉しさが大きかったようにも見られました。

2010年10月28日（木）

「モンブランケーキ作り」

来月にせまった「弥生ランド」に向けて、たんぽぽ組では、ケーキ屋さんやおもちゃ屋さん等を出店する計画です。本時では、自由あそびの中で、前日に準備された紙製のカップケーキをモンブランケーキに仕上げました。のりをつけながら、紙テープをケーキに巻いていく作業に挑戦です。

○活動の考察

昨日からの雨で、とても寒い午前中となりました。今日は保育室の中で、思い思いのあそびで過ごします。いつものようにブロックであそぶ子ども達、おままごとをする子ども達等、天気にも負けにくい子ども達は元気いっぱいです。そうした保育室の中央で、T先生が「弥生ランド」で開くケーキ屋さんの商品を、数人の子ども達と制作しています。自由あそびの中

での活動でしたので、ケーキを作りたい子どもだけが集まりテーブルを囲んでいました。

制作するケーキは、モンブランケーキです。本時では、黄色い紙テープを栗の細いクリームの部分に見立て、紙で作ったケーキのベースにつけていきます。紙テープにやまのりをつけながら、それをベースに巻きつけていく作業は、3歳児の子ども達には少し難しい作業だったようです。「のりをつける」と「紙テープを巻いていく」ことの二つの制作行為が、本時の活動には要求されるためです。ですが一斉活動ではないため、先生も少人数の子ども達と行うことが出来ました。また今回のモンブランケーキのようなサイズの成果物がかなり小さなものであるため、子どもと先生がほとんどマンツーマン状態で作業に取り組みました。集まってきた有志の子ども達への保育指導が手の届く範囲で行えたことは、成果物の仕上がり具合にも大きく反映されたのだと思います。

今回のようなごっこあそびでの見立てのアイテム作りでは、実物の特徴をどれだけシンプルに抽出するのか、また、それをどのような素材で表現するのが適切なかを考慮していくことが、とても大切になると思われます。そして3歳児クラスの保育では、子ども達の造形技術をどのように導入させるのかも含め、十分に検討しなくてはならないでしょう。「のりをつける」と「紙テープを巻いていく」ことの連動だけを見ても、教材や素材の研究視点として面白いと思います。

本時の活動において紙テープへののりづけの場面を振り返ってみても、「テーブルの上で、テープ全面にのりをつける」「テープを持ちつつ、のりを点づけする」「テープを持ちつつ、テープ全面にのりをつける」「ケーキのベース本体の方にのりをつける」等の子ども達の姿の違いが見られました。またどのパターンにおいても、のりがついた長い紙テープの取り回しが難しそうな様子でした。ちなみに、私は本時の活動記録を取りつつ、Nちゃんの手伝いをしましたが、Nちゃんの場合、「ケーキのベース本体の方にのりをつける」から「テープを持ちつつ、テープ全面にのりをつける」に作業が変化していきました。しかも最後の4個目の制作時では、集中力が無くなってきたことと、本人の指が小さく作業が少し面倒になってきたのか、人さし指から薬指までの3本を使ってのりをつけていました。

子どもの個別な技術発達、身体の高さと素材の高さの関連等、3歳児ではそうした些細な問題が活動内容と直接的に関わってくると言えます。大変に課題も多いことながら、子どもの年齢から生じる発達の特異性を取り入れ、保育を進めていく大切さを実感します。

2010年11月11日(木)

「ロールケーキ作り」

いよいよ「弥生ランド」は来週にせまってきました。たんぼぼ組の皆が作るお店の一つはケーキ屋さんです。先週はおいしいようなモンブランケーキを作りましたが、今週はロールケーキを準備しました。用意された様々な用紙を使って巻かれたケーキは、本当にかわいらしくおしゃれなものがたくさんできました。

○活動の考察

お店やさんごっこへの準備は、先月から継続的に行ってきたこともあり、子ども達はケーキを作るイメージがかなりしっかりと定着している感じがしました。今回は様々な色の用紙を使ってのロールケーキ作りです。15cm角程度の用紙を重ね、それを巻き、セロテープで留めていくといった作業でした。ケーキの準備は今回も一斉活動ではなく、興味のある子どもがテーブルに集まり行っていきます。そうしたことも影響し、集まってきた子ども達は、皆が集中して取り組めていました。今回の作業での造形的なねらいとして、次の二つをあげてみたいと思います。

(1) 紙の素材感に親しむ

今回取り組んだロールケーキ作りは、様々な種類の紙を選び、それを巻いていくといったシンプルな作業です。ですがそうした作業の中において、紙の素材感を手で確かめていくことの大切さが発見できたと思います。数種類の紙のテクスチャーは、視覚的に捉えるよりも、触覚的に捉えることの方がよりその素材の性質を感じることができます。例えばその性質は、表面の肌理、紙の堅さや厚み等といったことです。特に3歳児の子ども達にとって、この触覚への注目はとても重要な保育の観点だだと思います。目で見ること、つまり視覚的にもものを捉える知覚作業は、どうしても視覚情報(色やかたち)を脳で理解しようとしてしまいます。このことは、3歳児の子どもも同様だと思います。今回の作業の中でも、赤は「いちご」、茶は「チョコレート」といったように、視覚情報としての色の問題が、色そのものを味わう手前においてそれに対応したイメージに置き換えられています。このこと自体は、人が普段の生活の中で行っていることなのですが、実は、目で見ただけで頭で理解してしまうパターン認識が含まれています。子どもの感性の発達について考える時、どのように身の周りのものを知覚していくのかは、とても重要な課題です。イメージをあえて多用せず、素材を感じることに子どもを向かわせるために、触覚を重要視する保育はとても意味のあることだと思います。

(2) 紙を選ぶ楽しさ

触覚から紙の素材感に親しむことと合わせ、今回の活動では、紙を選ぶ楽しさが含まれている活動でした。この楽しさはむ

しる視覚情報を利用しながら、活動への関わりに対し、子どもの主体性を引き出していくものではないかと思われます。色の選択は、子ども達のロールケーキを作ってみたい気持ちを作り出すものに繋がられます。こうした意味において、素材の持っている視覚情報は、子どもの造形意識を誘発させる有効なきっかけとなります。紙の色だけではなく、テクスチャーのバラエティーも考慮されると、更に活動が充実すると思います。

2010年11月25日（木）

「クリスマスツリーと紙粘土のオーナメント作り」

「弥生ランド」も無事に終わりました。秋以降、たんぼ組での造形活動は、行事に合わせた内容が多くなっていますが、今回はクリスマスをテーマとしたものでした。日常生活を演出することの楽しさから、造形表現活動が身近なものとして感じられていくことを期待するばかりです。

○活動の考察

今回の活動は、空きカップをベースとした紙素材のクリスマスツリーと、紙粘土によるオーナメント作りに取り組みました。非常に作業量の多い活動内容でしたが、手を動かしながら、素材（紙、紙粘土）に触れていく経験を十分に与える時間となったと思います。前回のロールケーキ作りと同様に、今回の活動も触覚に主眼が置かれたものだったと言えます。

クリスマスツリー作りでは、赤い薄紙を使い、その加工に挑戦しました。作業は、紙を带状に「ちぎる」、带状になった素材を「ねじる」ことによって装飾物（リボン）に仕立てる、そしてその装飾物をやまのりを使ってベースのツリーに「つける」ものです。この一連の「ちぎる」「ねじる」「つける」といった作業はこれまでの活動でも経験されていますが、今回の活動での「つける」は、支持体が円錐形だったことも難しさが含まれていたと思います。平面の指示体に平面の素材を接着する、つまり面に面を「つける」のではなく、円錐形の曲面（接着する部分は、点、もしくは線的な状態です）に、ごつごつした装飾物（リボン）をつけていくことの難しさです。この作業は、点と点を接着していく感覚や、それを補うための接着剤（やまのり）の量の必要性を経験するものだと思います。素材どうしが接着しにくいことを考慮し、のりの分量への指導を丁寧に行うことが大切だと思います。

また紙粘土のオーナメント作りでも、手を動かし素材に充分に触れていくことのできた活動でした。クラスを二班に分け、クリスマスカラーである赤と緑のポスターカラーを練り込ませた活動運営もとても良かったと思います。紙粘土に触れていくだけでも、子ども達にとっては感触の楽しめる作業だと思いますが、更にその粘土の中にポスターカラーを入れこねていくことで、だんだんと粘土そのものの色が変化していく様子は視覚的にも美しく、作業をワクワクしていくものにさせました。また、粘土とポスターカラーで汚れた掌も子ども達は喜んでいましたし、作業を行った感触の証しを自分の掌から確認できたこともとても良かったと思います。ですが素材そのものがそうした楽しさを含む反面、紙粘土の素材としての目的である「成果物を作るための素材」という性格への意識が希薄になってしまうことも否めません。特に今回の活動の場合、オーナメントという最終的な成果物へのこだわりをどのように作業に反映させていくのかという課題は、保育にとってとても重要な要素と言えます。今後の活動に向け、紙粘土に対する素材研究や異素材との組み合わせについての実験を拡げていけると、よりユニークな、確実な作品が仕上がっていく活動に展開すると思います。

2011年1月13日（木）

「鬼のお面作り」

来月の節分に向け、たんぼ組の子ども達は鬼のお面を準備しました。2月3日の豆まきは、季節の分かれることを感じる大切な行事です。そうした行事に合わせての造形活動は、単に道具の制作に終わるだけでなく、その作業の中に行事に対するワクワクした気持ちをつくるものです。

○活動の考察

「鬼のお面」を作る作業は、作品の完成をイメージしやすい反面、制作の中には複数の造形技術が入ってきます。今回の制作でも、クレヨンで着色することや、顔のパーツをレイアウトする、のりを使って接着するなど、いくつかの行為がプロセスの中に入っています。そうした制作行為の過程を通じて、子ども達は作業内容を理解し、作品を作り上げることを経験していきます。この活動の振り返りとして、上記にあげた二つの観点（クレヨンでの着色、のりによる接着）から考察してみたいと思います。

・クレヨンでの着色

今回の作業では、クレヨンを使って円形の画用紙を好きな色にぬりつぶすことを行いました。この「ぬりつぶす」行為は、ど

うしても均一に画面を着色することに意識が向かってしまいます。「丁寧に台紙の端まできちんと色をぬろう」といったテーマを活動に課すのか、あるいは、「ぬりつぶす」行為そのものを子ども達のそれぞれの主体性に委ねていくのかによって、着色の仕上がりが違ってきます。前者は作業の到達点（ぬりつぶすこと）が明解であるので、子どもは作業を理解しやすい反面、制作行為が単純作業に流れてしまうと思われます。クレヨンを使った作業は、腕の関節をよく動かすことにもつながりますし、そうした意味では前者を作業のテーマにすることは、運動との関連性を重視した活動内容になります。

また後者の子どもの主体性に「ぬりつぶす」ことを委ねることは、作業の中から子どもの個性を見いだす可能性を持っていると思われます。色の濃淡や、場合によっては単色だけではなく混色も認めていく方向性も生まれます。そして後者のテーマは子どもの個性の認めだけではなく、次の作業となる色紙のレイアウトにも関連します。色紙は色面が均一ですし、子どもの個性が現れる台紙の色の表情とのコントラストが現れ、手で描いた痕跡が浮かび上がってくることが予測されます。

・のりによる接着

これまでの造形活動でも、のりの接着は何度も経験されている作業です。のりの機能についても子ども達は理解していますし、自分でその量を調整する姿も見られました。今回の制作は、のりづけの台紙にクレヨンの皮膜があることが大きな特徴だと思います。材料の相性から見ると、クレヨンは口で作られていますし、のりの接着効果が落ちると思われます。そうしたことを考慮すると、最初の作業であるクレヨンのぬりつぶしを少しルーズにし、画用紙の地がクレヨンのかすれから見えているくらいの方が、顔のパーツは接着しやすかったのではないかと思います。

2011年1月20日(木)

「枯れ葉を使ったお絵描き」

園の改修工事も始められる中、しばらくは園庭にある樹木も姿を隠されてしまいます。たんぼ組での造形活動ではこれまでも、自然との触れ合いを活動内容に取り入れてきました。本時では、枯れ葉を材料にユニークな活動が行われました。

○活動の考察

前回の「鬼のお面作り」でものりを使った活動が行われました。接着をシンプルに考えていくと、その行為は二つのもの(物質)を一つに合わせるものと言えます。二つのものを合わせるための媒体として、接着剤(のり)が必要なわけです。ですが接着剤は万能ではありません。接着を考える場合、接着する二つのものの相性をまずは想像し、スムーズに二つのものが合体できるような方法をイメージすることが求められます。今回の活動でのチップ状の枯れ葉とやまとのりの相性は、前述の理由から、とてもその選択に配慮がされた素材でした。

今回の作業は、「絵の具としてのチップ状の枯れ葉をつくる」、「画用紙にのりで図像を描く」、「枯れ葉をその上に乗せる」、「余分な枯れ葉を落とし、図像を出現させる」といったプロセスによって、お絵描きを楽しみました。この活動がユニークであったと感じた理由はいくつかありますが、子ども達はお絵描きをしている意識はあまりないままに、作品としての絵が完成したところが一番感心させられました。枯れ葉を手で揉んで素材を作る作業も、自然素材を触覚で楽しむものでありましたが、のりで描いた図像は画用紙が白だったために「絵を描く」という視覚的な認識はされないまま活動が行われることも、お絵描きではない絵画制作につながった点です。子ども達は、のりによって画用紙とチップ状の枯れ葉とが接着されることを、あそびを通じて経験できたと思います。

この活動の展開方法はいくつかあると思いますが、色彩についての考察は、活動を更に楽しいものにするための観点の一つです。今回は白の画用紙を使用しましたが、枯れ葉の色との関連性を積極的に考え、例えば黒やグリーンなどの色調の暗い台紙を用いてみたり、ピンクや黄緑などの鮮やかな色調の台紙を使ってみても面白いと思います。またそうした何種類かの色の台紙を、子どもが自由に選ぶことを活動に導入しても良いかと思います。絵を仕上げるという制作スタンスを取るのではなく、あそびの中で作品が生まれることを重視することが活動を拓けるポイントだと感じます。

お絵描きは、作品としての絵を制作していくのか、あるいはあそびとして行うのかによって、活動のテーマと内容が変わってきます。造形活動に限らず保育活動は、そうした初期的なテーマ設定が大切であることを今回の活動から考えさせられました。

2011年2月10日(木)

「おひな様の色紙作り」

3月のひなまつりに向け、たんぼ組ではおひな様の制作準備が始まりました。本時では人形の衣装の素材として、色紙作りを行いました。活動が素材作りだったこともあり、子ども達は、絵の具あそびとしても作業を楽しんでいた様子でした。

○活動の考察

今回の作業は、障子紙とポスターカラーを使った「色紙作り」でした。障子紙は、「おひな様をイメージする」、「絵の具が染

み込みやすい」といったことを考慮して、和紙素材が選ばれたのだと思います。先生方の制作物の支持体となる紙素材に対する考え方は、非常に日本的でやさしさを感じるものでした。造形活動をどこから展開していくのかという問題は悩みのつきないことですが、シンプルな進め方として、制作の主役となる素材を決定し、その特徴を活かしながら活動内容を展開していく方法があります。今回の場合、障子紙の素材性に着目して作業を進めていくと、もう少し違う保育が行えたのではないかと思います。障子紙の特徴をあげつつ、その制作上の留意点を振り返ってみましょう。

・障子紙について

障子紙は、家庭での設え用の紙として身近なものです。一般的に販売されている障子紙は、機械漉きのもので、紙の繊維の漉かれ具合が均一に仕上がっています。工業化が発達する以前は、紙は手透きであったわけですが、手透き紙の繊維（楮）の構造はふっくらとしているものです。つまり手透き紙は繊維と繊維の間に隙間があり、機械漉きの紙は繊維がつまっていると言えます。紙は繊維を平面的に固めたものなのです。和紙をちぎった際、小口から紙の繊維の表情が美しく見られますが、それは「ちぎる」という行為が、紙の特徴を活かしていることと直結しているからです。機械漉きの障子紙は、視覚的には和紙らしさを持ちますが、和紙の風合のやわらかさはあまり持っていないという性質が見られます。

・障子紙と絵の具の関係

上記のような障子紙の特徴を考慮し、絵の具との関係性をさぐってみましょう。今回の絵の具はポスターカラーでしたが、この絵の具は顔料絵の具です。つまり顔料を水性のメディウムで練った絵の具ですので、基本的に顔料が紙の上に接着されることで着色が成立します。顔料の粒子は以外と粗いと思われますし、今回のように機械漉きの障子紙に合わせた場合、どうしても、紙の表面で絵の具が止まってしまうと思います。素材は染み込みにくいものですので、染色での造形活動の場合、染料（インクなど）を使う方が効果的だと思います。保育活動の中で、染料を使った造形表現を行うことを展開しても面白いかと思います。以前に行った植物の色水作りは、染料としての絵の具の活動だったのではないのでしょうか。

2011年3月3日（木）

「枯れ葉を使ったお絵描き：その2」

今日は3月3日のおひな様の日です。たんぼ組さんからさくら組さんまでの3クラス合同で、ホールでひな祭りを行いました。本時の造形活動は、その行事の終了後に開始されました。今回は1月20日にも行った「枯れ葉を使ったお絵描き」の2回目。一度親しんでいる素材や作業ですし、子ども達は落ち着いて活動に取り組んでいる様子でした。

○活動の考察

枯れ葉を素材としたお絵描き活動は、今回で2回目となります。前回の活動では、はじめに子ども達は素材を揉みほぐすことを楽しみました。枯れた植物のごわごわとした感触を味わうとともに、出来上がった枯れ葉のチップを絵の具として使用するというユニークな表現を体験するものでした。前回の活動を振り返ってみると、活動の目的は、「枯れ葉」の物質性を感じる、あるいはそれを「のり」という媒体で紙に接着するという、各制作材料の持つ質感に触れることに主眼が置かれていたと思います。そうした前回の活動と比較すると、2回目となる今回の活動は、より積極的に絵画としての作品作りにこだわった保育だと感じました。その理由は、先生方が準備された素材の色彩のバリエーションにあります。一つは3種類の枯れ葉、もう一つは支持体となる紙が色画用紙だったことです。こうした活動の工夫は、子ども達の絵を描こうとする気持ちに大きく働くものだと思います。それでは活動においての色彩の問題について、考察をまとめてみましょう。

まず今回の活動で用いられた枯れ葉は、イチョウ、モミジ、サクラの3種類でした。それぞれの色は、黄色（イチョウ）、赤（モミジ）、茶色（サクラ）で、茶系統のものでありながら、それぞれの色彩は子ども達にも認識でき、自分が使いたい色へのこだわりを引き出すものでした。色彩は、人間の視覚を刺激するシンプルな素材と言えます。もちろん色彩は心理的にも作用するものですが、3歳児の造形活動においては、目の前に現れた色彩に対する子ども達のイメージや記憶の重なりは、まだかなり少ないのではないかと考えられます。むしろ色彩に対しては、今感じている感動や視覚的な刺激として機能をしていることの方が強いと思われます。そうした意味では、3歳児の子どもにとっての色彩は、頭の中で理解していくものではなく、純粋な経験として身体に入ってくる刺激なのです。

また活動の支持体である紙においても、2種類の色画用紙が用いられました。黒と濃紺の2色の画用紙です。どちらの色もアンダー色ですが、かなり視覚的な抵抗感の強い色が選択されたと思います。ですが今回の活動では、次のような制作への影響が見られました。それは、のりで描いた線の反射が見えやすかったことです。前回の制作では使用した画用紙が白だったため、のりの反射光が今回の活動よりも認識しにくかったようでした。枯れ葉のチップをかけるとどのような形が現れるのだろうかという制作方法に対し、今回は、子ども達は描きたいかたちをしっかりと描いている姿が見られました。T君はかたちを表現することにこだわっていましたし、Nちゃんからは画面のレイアウトを意識している様子が見られました。また色画用紙の効果として、完成した作品の中に素材の密度や制作の充実感がもたらされたことも感じました。そして子ども達は一連の活動を

通じ、のりで描く行為と完成された画面との繋がり感じたのではないのでしょうか。

今回の活動においても、保育への自然物の導入はユニークさを感じさせるものでした。色彩にこだわって教材を準備された先生方の意欲が、活動の充実に繋がったと感心させられました。

2011年3月17日(木)

「発砲トレーによる版画あそび」

日常生活に見つけられる様々な素材からも、幼児の造形活動は展開が可能です。意識をしなければただ単に資源回収される発砲トレーも、そうした素材の一つです。発砲素材は軽く柔らかい材料ですので、子ども達の作業においては安全なものと言えるでしょう。本時は、その発砲トレーを使った版画あそびが行われました。

○活動の考察

発砲トレーは、スーパーマーケットで使用されているお皿です。魚やお肉等、様々な生鮮食品のラッピングに用いられている素材なので、形やサイズ、表面のプリントに至るまで、多種多様なトレーが流通しています。そうした日常の中でのありふれた素材に注目することは、子ども達のあそびの世界を拓けるきっかけにも成りうると言えます。保育においてその素材をおろす場合、素材の持つ個性を十分に理解することから造形活動を初めることが大切だと思います。まず今回の活動で用いられた発砲材について、保育での造形的な作業の観点から素材の特徴についてまとめてみたいと思います。

〈発砲トレーの特徴について〉

- ・教材として集めやすい(日常的な素材である)
- ・加工しやすい(切ることが容易である、板状の素材になる)
- ・張りのある素材である(強く曲げると割れてしまう)
- ・軽い
- ・様々なサイズがある(板状にした場合、規格サイズをそろえにくい)
- ・水分を弾く
- ・表面が柔らかく、傷がつきやすい 等

こうした素材の特徴を踏まえ、次に版画という技法の基本構造について考えてみたいと思います。版画とは基本的に、版(絵柄を彫り込んだ原板)にのせた絵の具を紙に刷りうつしていく作業なのですが、版画の種類には、凸面に絵の具をのせそれを紙にうつしていく版画(木版画など)と、凹面の溝に入った絵の具を強い圧力によって紙にうつしていく版画(銅版画、エッチングなど)と、大きく二種類の技法があります。前者は刷る際、凸面以外の絵の具を紙にうつさぬような刷り方が求められますし、後者の技法は余分な絵の具を拭き取り、凹面の溝の絵の具のみの状態の版を用意し、プレス機で紙と版を圧着させていく作業と方法をとります。版画の制作を計画する際に大切なことは、版の状態を凸面にするのか、あるいは凹面にするのかによって、進め方と制作の配慮が異なると言えます。

では発砲トレーの特徴と版画の構造を考え合わせ、今回の活動を振り返ってみましょう。

活動ではまずはじめに、子ども達は配られたトレーに割り箸ペンで自由な線を描きました。発砲材は柔らかく、表面に溝が出来ていく感触を子ども達は楽しみました。(ここまでの版(原板)の状態は、凸面も凹面も共存しています。)次に絵の具(ボスターカラー)を版の表面に塗り、そこに紙をのせました。(ここで今回の版画技法が、凸面を活かした版画であることが明らかになりました。)そして紙に絵の具をうつし取ります。

こうした一連の作業工程を振り返りますと、発砲材を使った凸面の版画で注意するポイントが見えてくると思います。主なものとして3点のポイントをあげてみたいと思います。

〈制作のポイント〉

- ・版上の絵の具は凸面のみにのっている方が望ましい
- ・発砲材は柔らかいので、刷る際には、表面を潰さないようにする
- ・容易に紙に絵の具がうつるような絵の具の状態を準備する

考察を深めると版画の技法は難しくなりがちですが、版画は基本的に版上の絵の具を紙にうつすことですから、もともとはシンプルな表現方法だと思います。ポイントをつかんでさえいれば、簡単に楽しめる造形活動になるはずです。紙をめくってみるまで絵が判らないという楽しさ(ドキドキ、ワクワクする気持ち)を、これからも子ども達と積極的に味わってみて下さい。



2010年4月8日



2010年4月15日



2010年4月22日



2010年5月13日



2010年5月20日



2010年5月27日



2010年6月10日



2010年6月17日



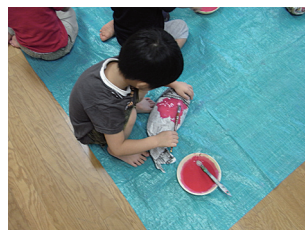
2010年6月24日



2010年8月9日



2010年8月23日



2010年9月9日



2010年9月16日



2010年9月30日



2010年10月14日



2010年10月21日



2010年10月28日



2010年11月11日



2010年11月25日



2011年1月13日



2011年1月20日



2011年2月10日



2011年3月3日



2011年3月17日